

Teaching Assistant (TA) との協働で授業を豊かにする

FD 主任着任のご挨拶と TA 制度関連の取り組みについて／久保 謙哉	1
第 2 回 TA/LA 制度に関する調査 集計結果まとめ	2
ICU の TA 制度——過去と将来／森本 あんり	4
教育者養成としての TA 制度の必然性／生駒 夏美	4
ICU における TA とコース開発／ウォルター・ドーンソン	6
自然科学系実験・実習クラスにおける TA の役割／小瀬 博之	7

新任教員の紹介

ベヴェアリー・カレン 9／岩田 祐子 9／金子 拓也 10／河内 宏 10／新垣 修 11／橋本 和典 11

FD セミナー報告

オープンコースウェアとオープンエデュケーション／久保 謙哉	12
より効果的な授業を目指したティーチング・アシスタントの活用について／西納 由紀	13

❖ Teaching Assistant (TA) との協働で授業を豊かにする

FD 主任着任のご挨拶と TA 制度関連の取り組みについて

久保 謙哉

ファカルティ・ディベロップメント主任

2013 年 4 月からファカルティ・ディベロップメント (FD) 主任を拝命しました化学および環境研究メジャーの久保謙哉です。ICU に着任してから 11 年半が経ちましたが、講義や実験科目の実践に自信を持っているわけでも、何かの新しい工夫を皆さんにお伝えしたいと意欲的であるわけでもありません。私の講義や実験指導のスタイルは、先輩諸先生方や同僚の皆さんのやり方を見よう見まねで取り入れてきたもので、独自に自慢できるものは皆無です。自分が FD にかかわる事で自分自身を振り返り、残りの時間を有効に使いたいというまっとうな目的意識もあるにはあります。けれども FD をお引き受けしたときの一つの大きな目的であり小さな希望は、ICU で仕事をするとき、最小限の時間と労力で最大限の効果を上げられるように、教員（とできれば職員、学生も）の環境を少しでも改善したいということです。

つねひごろ教育や研究そのほか大学の業務に携わっているわけですが、どうにも非効率的に時間と労力が消費されているように感じられ、勤労意欲をそがれてしまう場面に出会います。必要十分とは思えない構成員の会議、新しい試みを規制する根拠がよくわからない規定、煩雑で記入方法がよくわからない書式、同じような内容で提出したような気がする書類、操作を一工夫しないと使いが伝わらず、ディスプレイに呪詛を吐きつつ使わ

ざるを得ないコンピュータソフトウェア等々。書類については勘違いや、毎回記入法を忘れて人を煩わせる自分が悪いことも多いではありますが、この不平不満リストの意見募集をするだけで、FD Newsletter の原稿依頼の悩みは雲散霧消するに違いありません。

このような直接講義に関係しない部分を含めて、効率的に業務が捗るよう環境の整備をお手伝いすることによって、FD が本来意味する授業の向上に使える時間と労力（と意欲）を生み出すことも FD 活動の一部であると自分流に解釈して、少しずつでも勤労と勉学環境の改善ができればと考えています。

かつては「不満があるなら、まず自分ができることから何とかすべき」ということで、例えば 2003 年度まで毎年配られていた便利な“ICU 三角カレンダー”を自作して周りの人たちに配っていたこともありますが、ここ数年は不便への忍耐と作成意欲のバランスが崩れて放置状態です。また便利なものは共有すべきということで、まずは本郷好和先生がお作りになっている ICU glossary（これも以前からあったが更新されていなかった）を web に掲載してもらいました。今度は自分が動かなくとも、強力な事務スタッフの方々のおかげで怒濤の勢いで周りが動き始めています。私は渦中とはいいいながら、台風の目の中に

いるかのように、風の動きにつられてゆるゆると追従しているところですよ。

さて、FDを拝命するときに森本あんり学務副学長から、ICUに1958年にはすでに存在していたTeaching Assistant (TA) 制度はおそらく日本での嚆矢であって、教育改善に関わるICUの積極的な取組みは創立当初からの伝統であることを伺いました。2008年の教学改革時に、その流れに乗って今のTA制度が導入されてすでに成果をあげ学生にも歓迎されているところですが、既存の事柄で改善すべき点や、より効率的で効果的な運用のために導入すべき事柄が浮かび上がって来ています。

学期末にはTAに勤務簿を提出してもらっていますが、勤務簿にあるコメント欄にはいろいろな問題が指摘されています。同じ勤務条件にも関わらず他のTAと勤務時間が大幅に異なる例や、TAに期待されているものではない勤務内容ばかりであるものなどです。特に、TAは講義を補助すると同時に、将来教育に従事する意志のある大学院生が自らが講義できるようになるための教育を受けることが定められているにも関わらず、担当教員から何の指導も受けていない場合もあります。

これらの指摘されている点は、TA任用において勤務時間に比例するポイント数のみで任用申請が行われ、仕事内容については担当教員の裁量に完全にまかされてきていることに多く起因しています。大学院生という貴重な人材を大学予算で使う事を考えると、少なくとも最初のTA任用申請時には、勤務時間とその内容に基づいてポイントの根拠を示すとともにTAへの教育内容を明らかにし、その情報をTAも認識しているべきでした。

今回の制度見直しでは、まずこの第一段階にあるべき手続きにもどって教員の皆様に任用計画書

を提出して頂くということにしました。教員の手間を省くという個人的な目標には反しているのですが、一つの科目については基本的に一度だけ作っていただければ、来年度以降は変更がある科目についてのみ作成をお願いする事になります。その内容をTAにも共有してもらって、TAの待遇の改善につながり、より意欲的・積極的に活動してもらえることを期待しています。

また、教学改革以前には一般教育科目にteaching helperという事務的作業を手伝ってもらう学生がついていました。この人たちはTAとは違って授業内容に関与するのではなく、コメントシートの配布など教員の作業を手伝うものでした。今回の見直しでは、このような科目に関する専門知識を持っていない学生でもできる仕事を担当するClassroom Supporter (CS) という職を、いわば復活させることにしています。クラスの形態によってTAとCSをうまく使い分けたり、組み合わせさせて使ったりすることができるようになります。

教員の職務とは離れて事務的観点から見ると、これまで一学期一枚の紙で行われていたTAの勤務時間の管理法の問題というものもありますが、2013年4月から施行されている労働契約法の改正によって、TAのみならず契約を伴う雇用者についての雇用年限などについても、大学としての対処が必要になっています。

このFD newsletterでは、TAを使った経験や、ご自身がTAとして働いた経験、TAへの期待についての文章をお寄せいただいています。教員とTAとなる大学院生、事務職員を含めて、改めてTA制度について考えて知恵を出し合い、ICUの教育をよりよいものにしていける機会となることを希望しています。

第2回 TA / LA制度に関する調査 集計結果まとめ (抜粋)

調査対象：127名 (2013年度春学期に任用されたTA/LA全員)

回答者数：61名

回答率：48.0%

回答期間：2013年6月12日(水)～2013年7月1日(月)

調査方法：Webアンケートを作成し、ICUPortal及びメールで回答を依頼

1. TA/LAとして任用されたコースの受講生数は何人くらいでしたか。

	回答件数	割合
10人未満	6	6.3%
10～19人	15	15.8%
20～49人	39	41.1%
50～99人	19	20.0%
100～149人	12	12.6%
150人以上	4	4.2%
計	95	100.0%

2. TA/LAとしての業務のうち、あなたの専門知識を必要とする業務は何パーセント程度ありましたか。

	回答件数	割合
80%以上	38	40.0%
60～79%	14	14.7%
40～59%	10	10.5%
20～39%	17	17.9%
20%未満	16	16.8%
計	95	100.0%

3. 授業中にTA/LAの業務を行った時間が授業時間全体に占める割合は何パーセント程度でしたか。

	回答件数	割合
80%以上	19	20.2%
60～79%	9	9.6%
40～59%	15	16.0%
20～39%	17	18.1%
20%未満	34	36.2%
計	94	100.0%

4. 授業以外の時間帯に仕事をしましたか。

	回答件数	割合
授業時間以外にも仕事をした	80	83.3%
全くしていない	16	16.7%
計	96	100.0%

(授業時間以外にも仕事をした場合)

- 1コマあたりの業務時間数

1コマに対して

	回答件数	割合
0.5時間未満	8	10.7%
0.5時間	10	13.3%
1.0時間	24	32.0%
1.5時間	5	6.7%
2.0時間	12	16.0%
2.5時間	0	0.0%
3.0時間	7	9.3%
3.5時間	1	1.3%
4.0時間	3	4.0%
5.0時間	0	0.0%
6.0時間以上	2	2.7%
その他	3	4.0%
計	75	100.0%

(授業時間以外にも仕事をした場合)

- 1コマあたりの業務時間数

学期を通して

	回答件数	割合
10時間未満	17	23.0%
10時間以上	17	23.0%
20時間以上	17	23.0%
30時間以上	5	6.8%
40時間以上	4	5.4%
50時間以上	3	4.1%
60時間以上	4	5.4%
70時間以上	2	2.7%
その他	5	6.8%
計	74	100.0%

5. あなたがTA/LAとして任用されることで、授業効果の向上(学生にメリット)があったと思いますか。

	回答件数	割合
非常に効果があった	31	33.0%
ある程度効果があった	56	59.6%
あまり効果はなかった	6	6.4%
全く効果はなかった	1	1.1%
計	94	100.0%

6. そのコースのTA/LAを担当することは、あなたの研究活動に、あるいは、将来あなたが教育に従事する際に役立つと思いますか。前者は「教育」、後者は「教育」の項目で回答してください。

	回答件数	割合
[研究] 非常に役立つ	43	44.8%
少しは役立つ	40	41.7%
あまり役立たない	11	11.5%
全く役立たない	2	2.1%
計	96	100.0%

	回答件数	割合
[教育] 非常に役立つ	72	75.0%
少しは役立つ	18	18.8%
あまり役立たない	4	4.2%
全く役立たない	2	2.1%
計	96	100.0%

7. 以下はTA/LAが実際に担っている業務の一例です。これらのうち、あなたにとって教育研究の補助業務と思われる業務は「教育研究の補助」を、左記以外の事務的な補助業務と思われる業務は「事務的補助」をチェックしてください。あなた自身の主観に基づいて判断して下さい。また、TA/LAとしてそれらの業務を「やりたい」と思うか、「やりたくない」と思うか、回答してください。

	教育研究	事務
質問対応補助	60	0
グループ討議補助	59	1
実技/実習指導補助	57	3
コメントシート分析・対応	54	5
教材・資料の準備補助	49	11
授業計画・シラバス作成補助	48	12
eラーニングツール補助	37	21
成績管理補助	37	22
出席管理	26	33
試験監督補助	22	37
コメントシートや資料の配布/回収	20	39
機材操作補助	18	41
シラバス掲載補助	13	45
機材設置	13	47
機材・教材片付け補助	12	48
印刷業務	10	49
機材予約	9	51

※「教育研究」という回答件数が多い順にソートしています。

TA/LAとして	やりたい	やりたくない
グループ討議補助	56	2
実技/実習指導補助	55	5
質問対応補助	55	5
コメントシート分析・対応	50	9
コメントシートや資料の配布/回収	49	10
教材・資料の準備補助	48	12
出席管理	46	13
eラーニングツール補助	44	14
機材予約	43	17
機材操作補助	43	16
成績管理補助	43	15
授業計画・シラバス作成補助	41	19
機材設置	41	18
印刷業務	38	21
機材・教材片付け補助	37	23
試験監督補助	36	23
シラバス掲載補助	28	30

※「やりたい」という回答件数が多い順にソートしています。

ICUのTA制度——過去と将来

森本 あんり

学務副学長

本学のTA制度は、戦後日本の大学教育史における最初の導入例として各種文献にも認知されている。これまでその導入時期は1968年とされてきたが、先日、本学初期の卒業生に体験談を伺い、この制度がすでにその10年前の1958年には実在し機能していたことを知らされた。お話をくださったのは、2期の卒業生で東京女子大学名誉教授・日本語教育研究所理事長の上野田鶴子（うねのたづこ）氏である。上野氏は、1958年に学部を卒業後、そのまま大学院に残り、学部授業のTAを担当された。その業務内容には講義や採点も含まれ、報酬は授業料免除であったという。この経験は、その後ミシガン大学へ留学なさった折にも大いに役立った、とのことである。これは歴史的にも記録の訂正を迫る貴重な証言であるが、ICUがTA制度について今後果たすべき役割の重要性を再認識させるという点でも、われわれを鼓舞し勇気づけてくれる話である。

すでに何度か教授会でも論じられた通り、本学のTA制度改革には、学部教育の充実と連携、

大学院生の教育と支援など、多くの実りを期待することができる。本学のような小規模私立大学にとり、学部と大学院の緊密な連携は死活問題であり、TAはその重要なパイプ役でもある。幸い、久保謙哉FD主任のリーダーシップと学事部スタッフの熱意あるサポートにより、新しい制度の骨子が固められつつある。FD作業班は、学生教職員からのフィードバックを得つつ、国内外諸大学の例を参考にしながら制度作りを進めてきたが、国内関連法規との慎重な突き合わせにも時間をかけた。文字になって提出された改革案の背後には、関係者による膨大な努力の積み重ねがあることをどうかご理解いただきたい。

新制度への移行には戸惑いもあろう。だが、ICUはこれまでも道なき道を歩み、それが他大学のモデルとなってきた、という誇るべき歴史を有している。本学の教育をより豊かなものとするため、教職員一同のよきご理解とご協力をお願いする次第である。

教育者養成としてのTA制度の必要性

生駒 夏美

美術・文学・音楽デパートメント

TA制度に関して様々な改革の模索が行なわれている今、TA制度には大学院生を将来大学教育に携わる者として養成する面もあることを、思い起こす必要がある。大学院生は単なるアルバイトとしてTA業務に関わるのではなく、TAを務めながら、コースをどのように運営していくのか、授業をどのように組み立て、プレゼンしていくのか、どのような課題を出して、どのように公正な成績をつけるよう努めるのかなど、教職の授業では学べないようなことを実地でつぶさに見ながら

学すべきなのである。その貴重な機会を活かすための制度改革が考えられるべきであり、教員側も将来の教員を育てているという意識を持ってTA業務を配することが肝要である。

こういったTA制度の一面を鑑みれば、TAにはTeaching Assistantという名称通り、Teachingの部分にもっと関わられるようにすべきであって、TAセッションのような時間を担当できるシステムにすることが望ましい。現在、ICUではTAによる「代講」はできないとされている。しかし

「代講」ではなく、ゲストレクチャーのようなものや、TAによるグループセッションは許可されるべきではないか。米国ハーヴァード大学では、教員が担当する全体講義と少人数に分かれて行なうTAセッションが組み合わせられて1つの授業となっていた。このシステムはなかなか優れていて、学生側もTAに気軽に質問することができるので理解不足を補うことができるし、TAの方も教える意識をもって授業と関わり、将来教員となるにふさわしい能力を培うことができる。教員も講義ではなかなかフォローアップできない各学生の修得度をTAを通じて知ることができ、その後の講義に活かすことができる。この場合、履修人数が多い授業ではTAは複数となる。現在のポイント制は時間で業務を管理する制度になっているが、これは単純作業に相応しいシステムであって、TAを教育にもっと関わるようにするためには業務によって報酬が与えられるシステムに変更する必要がある。そもそも教育業務を時間で割り切ることにはできないので、このような報酬制度の方が合うのではないだろうか。

今回の改革で提案されているTAとClassroom Supporter (CS)の二種類の助手制度は、専門的な知識を必要とする作業に関わるか否かで助手の種類を分けようとするものだが、少々線引きが難しいと感じている。それはTAの作業のうち、どこの部分が「専門的な知識を必要とする作業」であるかの判断が微妙なものであるからだろう。授業のハンドアウトを作成する作業も、その一部は単純作業としても、教員にとってみれば専門知識を有している助手の方が便利であるし、また「教育」の側面から考えれば、そのような作業も教員となるのに必要な作業である。

むしろ、上述したようにTAにはもっと「教育に関わるもの」として明確に打ち出すのがよいのではないだろうか。このようなTA制度にすれば、CSとTAの相違点は明らかになるだろう。この両者は取り替えられるような存在ではないし、TAがついている授業でもCSは必要である

ケースがほとんどだろう。

ただこのような制度の問題点として考えられるのは、ICUのような小規模大学院においては、教員と専攻分野を同じくし、教員のTeachingを補助しうる大学院生が確保できるかという点である。現在も大学院生は自分の専攻と無関係の授業でTAをしていることがある。だがこのようなTA制度でしっかり将来の教員を養成していくシステムにすれば、ICUの大学院で学ぶ魅力の1つとなりうるのではないだろうか。

CSについては現在の授業ヘルパーのように、事務所に詰めてオンデマンドで作業を行なう形にしてもよいのではないか。履修人数によってTAの有無やポイントが決まる実情であるが、上記のようなTA/CS制度にした場合、明確に教育に関わるTAの必要性については教員が授業ごとに決め、CSは誰でもいつでも利用できるようにするのが良いだろう。

このような形にするメリットとしては、CSやTAがアシスタント業務についての知識を学び合う場が作られることが挙げられる。たとえ自分の専門外の作業に関わっているCSであっても、教材の作成などの知識や手法を学ぶ機会を得ることは重要なことである。また孤独になりがちな大学院生が、このような形で自分の専門外の院生とも関わり合うことは大学院生のメンタルヘルスケアのためにも有益だ。教員側の都合ばかりを考えるのではなく、ICUの大学院生の教育の一環としてTA制度を見直していく必要があるのではないだろうか。

TA経験者の大学院生に意見を聞いたところ、やはり講義やセッションをやらせてもらいたがっていることがわかった。もちろんこの制度を機能させるためには、TAの相談窓口を別に作り、過重労働や不当搾取が行なわれていないかチェックしたり、トラブル解決を図ることが重要である。この点についてもTAから要望を受けていることを書き添えたい。

ICUにおけるTAとコース開発

ウォルター・ドーソン

教育学パートメント

先日、ある国際的なバックグラウンドを持つ学生と面談したところ、現在進行中のICUのTA制度に関する議論にとって有益な示唆を得ることができた。この学生は、学部生として過ごしたカリフォルニア大学バークレー校で学生支援団体に籍を置き、めざましい活躍をした。そのような活動を学生生活の一部と捉え、大学コミュニティの一員として大きな学びを得る機会でもあったと考えていたこの学生は、ICUの大学院生としても同様の活動に従事するつもりであった。私はバークレー校のように高名なリベラル・アーツ大学に、学生に参加を促すそのような仕組みがあることは当然だと感じた一方で、この学生がICUでも同様の活動をしたいと切望するほどにそのような仕組みに魅力を感じていることには驚かされた。駆け出しの研究者だった頃、私は日本の中学校における生徒会について調査していたことがある。したがって、この学生が提起した学生生活への参加や、政治的社会的なような主題は、私にとって真新しいものではない。むしろ、そもそも私がそのような研究に取り組んだのは、学生生活の経験を通して、学生や生徒がより積極的な市民となり、民主主義を盛り立てるような状況を夢想してのことだった。ICUは、多くの理想を掲げて創立された大学である。その一つは、民主主義の理想を体現するアカデミックな共同体を設立する、というものであった。しかし、ここで敢えて言わなければならないが、ICUの様々な側面において、学生に与えられた参加の機会はきわめて限られたものである。いま問題となっているTA制度に関する議論には、教員と学生との関係を見直すことで、授業の設定や実施の過程、あるいは教育プログラムの全般にわたって、学生に意義深い参加の機会を与える糸口となるような、そんな可能性が潜在しているのではないだろうか。そこで、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジでの私自身のTA経験について語ることで、この議論に資することができればと考える次第である。

ティーチャーズ・カレッジでのTA経験

ティーチャーズ・カレッジは、コロンビア大学大学院教育学部を指す名称である。ほとんどのアイヴィー・リーグの大学同様、コロンビア大学の学部には教育学部はもちろん、教育学メジャーも存在しない。これ自体、米国における教職の現状を示唆する残念な事実である。そのような状況であってみれば、私のティーチャーズ・カレッジでの経験は、TAと、いくつかの大学院の授業を受け持つ、ということに限られていた。(議論を深めるためにも、他大学の学部でTA経験のある教員には、ぜひその体験を紹介していただければと思う。)

ティーチャーズ・カレッジでは、二つの授業のTAをしていた。「比較国際教育」(修士課程の学生全員に義務づけられている授業である)と、「国際教育とプランニング：市民リテラシー」である。これらの授業を担当していた私の指導教授は、履修者の多い前者の授業には四人のTAを任用していた。したがって各TAはだいたい12人の学生に対して責任を負い、講義やリーディングに関するディスカッションを取り仕切っていた。またTAには一年生にライティングの指導を行うことも期待されていた。学術的な論文の書き方を教えることで、国際開発の道を歩んでゆく学生たちを後押しするためである。ディスカッションの準備や取り回しの訓練を積めたことは私自身にとっても得難い経験であった。このディスカッションは言うまでもなく、ICUのリベラル・アーツ教育においても不可欠である。学生の多くは国連や世界銀行、あるいは草の根運動を行うNGOの現役職員や出身者であったので、ディスカッションはしばしば白熱した。学生たちは所属している組織同士の力関係や利害関係を気にすることなく自由に意見を述べることができたので、ディスカッションはとても貴重な場となった。学生たちは間違いなくそれまでの思い込みがぐらつくのを経験しただろうし、開発にかける意気込みを新たにしたらろう。このように、この授業での

TA 経験からは多くの恩恵を受けたのだが、実は、私が本当に大学での授業を組み立てるのに必要な研鑽を積んだのは、後者の授業の TA としてであった。

そもそも市民リテラシーという授業が開講されたきっかけは、指導教授とのやりとりのなかで私が口にした市民教育への関心と、民主化の過程において教育が果たす役割とは何か、という問いかけであった。博士課程での私の専攻は政治学だったので、国際関係・公共政策大学院 (SIPA) や政治学デパートメントなどの授業を幅広く履修することができた。「東アジアの民主化」や「人権教育」などの授業にとくに惹かれ、私は最終的に日本およびアジア諸国における学校教育と政治的社会的関係性について研究することになった。この関心事について指導教授に説明すると、驚いたことに、教授は「わかりました。では、授業を作ってください」と言ったのである。一からシラバスを作り、分野に最適な参考文献を探し、学びを形づくる課題を考える、という難解な作業の重圧に押しつぶされそうになったことは言うまでもない。もちろん指導教授は、悩む私を放ったらかしにしたわけではない。教授は、優れた師が皆するように、明らかに私の能力と才能の限界を超えるような仕事を与えることで、私が自分の限界を覚るように仕向けたのである。いまでも、新たな授業を考案するたびに、あるいは既存の授業を改良しようと試みるたびに、当時の記憶がまざまざと甦ってくる。私は自分の無能さを嘆きながら教授に相談に行った。それからは週に一度、教授と

話し合い、学生に読ませる文献や教室での活動など、授業の運営に必要な様々なアイデアを絞り出した。正直に言えば、一年目の授業はやや危なっかしいものであった。学生は私がどのような質問にでも答えられるものと思っているが、実際はそうではなく、またもや私は自身の限界を思い知った。それでも二年目には、うれしいことに、いくつかの重要な改良を経て、きれいにまとまった授業を組み立てることができたのである。

ICUのTA制度をふりかえる

ティーチャーズ・カレッジでの TA 経験のなかで最も鮮明に記憶に残っているのは、授業を作れという指導教授の言葉だった。それは私の学びにおける衝撃的な瞬間であり、言ってみれば教育的な雷に打たれたようなものである。私のこの経験が、ICU の同僚たちに何らかの材料を提供できれば幸いである。ICU でのコース開発の過程には、TA の入る隙間はわずかしかない。だがその隙間にこそ、TA たちにとって得難い経験となり、彼らの教育者・研究者としての将来に大きな利益をもたらす何かがあるかもしれないのだ。もちろん、大学院生は例外なく教員になるべきだ、と言いたいのではない。しかし、授業を受けるのではなく教えてみる、という経験から学ぶことは多い。自分だけの指針を持った、ひとり立ちした研究者を育てることは、学生たちにとって莫大な利益となるのみならず、世界基準を謳う ICU の教育にも大いに貢献することだろう。

(日本語訳：FD オフィス担当)

自然科学系実験・実習クラスにおける TA の役割

小瀬 博之

生命科学デパートメント

ICU では昨年度 TA が配置されている自然科学系実験・演習のクラス (以下、実習科目) が 23 クラス開講された。一科目あたりの TA の人数は 1.6 名であり、TA 一人当たりの受講者数は 8.2 人となる。これは実習科目ではない自然科学系クラスの場合 (TA 一人当たり 20.8 名) と比べて

かなり少ない。本稿では実習科目が TA を必要とする特別な理由と実習科目が抱える現 TA 制度の現状・課題についてまとめてみたい。

実習科目における TA の役割

1. 安全管理 言うまでもなく実習科目では学生

の安全が最優先されなければならない。劇薬、工具、電気機器など誤った使用により負傷したり、短・長期的に健康を害する可能性がある。それを未然に防ぐための TA の役割は強調してもしすぎることはない。

2. 学生の健康管理 野外での活動を伴う実習の場合特に必要性が高くなる。例えば、生物学臨海実習 (BIO253) では炎天下で磯採集を行うことがあるが、実習中常にモニタリングを行い、体調不良の学生を迅速に見だし対処することは極めて重要である。
3. 円滑な授業運営 実習科目では実験手順を順序正しく行うだけでなく、各行程をクラス全体がほぼ同じ速さで進めていく必要がある場合がある。一部の学生が躓いてしまうとクラス全体に待ち時間が生じて授業のリズムが失われてしまう。円滑に作業を進めることは、効率の問題だけではなく、学生の集中力持続にも大切な要素であり、ひいては安全確保にも重要である。
4. ディスカッションリーダー 実験結果のデータの解釈には多角的な思考が必須である。初学者はしばしば予期しない実験結果に遭遇する。また、テキストに掲載されているようないわゆる「美しいデータ」を得られない場合も多く、その原因や意味について深く探っていくためにマンツーマンに近い指導が行われることは大切である。逆の見方をすれば、原理としては容易に思える実験が、細微に至る用意周到な段取りなくしては期待通り結果が得られないことや、教科書的な典型的データはある意味いかに現実的でないかということを発見することが実習の意図とされている部分でもある。従って、生データを先輩研究者である TA と共に議論することは、研究に対する姿勢を肌で学び取る貴重な機会となっている。
5. 実験機器・用具の準備及び管理 試薬や用具の手配、実験器具の動作確認、また実習の後片付けなど、実習ではクラスの事前・事後に必要な作業が多いため TA による補助は教員の負担軽減となっている。

実習科目における TA 制度の課題

1. 学外 TA の業務 ICU の TA はその多くが学外の大学院生である問題が指摘されている。上

記の実習科目 TA の役割の中で、「実験機器・用具の準備及び管理」について、学外 TA がこれを行うのは難しい。ところが実験器具等準備は実習科目を担当するにあたって教員が最も時間と労力を要する部分である。TA が学外生であるために教員の負担軽減にあまり貢献していないケースがある。

2. 緊急事対応 理系メジャーを選考した 4 年生は毎年 4 月に行われる安全実験講習会の受講が義務づけられている。実習科目中に起こった緊急事態にはそれに則った対応が求められるが、学外 TA に対して特に指導が行われていないケースがある。TA が学内者である場合であっても、緊急事対応の再確認作業を組織的に行う必要があると思われる。
3. TA 教育という側面の欠如 ICU における TA 制度の主旨は学部学生に対する教育の質の向上だけではなく、TA 自身の教育にも寄与することと謳われている。残念ながら現状では実習科目の TA は専門的知識を持った実習助手の域を超えていない。アメリカの大学などでは、教員の指導の下、TA は実習の一部を下準備から、実習の背景知識・実験手順の説明、またレポート採点までを任されることがある。ある一定の責任を付与することにより、TA はより主体的かつ創造的に教育に関わることとなり、将来大学教員として必要な技能を習得、発展させていく機会になっている。もちろん、このような経験は大学教員以外のキャリアにおいても大きな意味を持つであろう。教員の責任を、学部学生の直接的な教育から TA の教育技能向上へ重点をシフトするような意識改革が求められる。

学問的関心が多様性に富む ICU 生へのリベラルアーツ教育という観点からも、TA のより主体的な教育への参画促進は重要であると思われる。ヘルパーとしての役割を越えて、TA を巻き込んだ形でむしろ TA との協働を模索しながら学部教育を発展させていくという視点は ICU の大学院教育を特色づけることになるであろう。理系科目の中では、実習科目は比較的それを実践に移しやすいのではないだろうか。

❖ 新任教員の紹介



ベヴァリー・カレン

社会・文化・
メディア部門

新たな冒険への出発はいつもワクワクするものです。ここ東京のICUで翻訳を教えるため、この4月に名古屋から引っ越してきました。この経験はまたしても、翻訳が様々な意味で私たちの人生の一部であることを教えてくれました。翻訳研究に最初に興味を持ったのはカナダの作家、マーガレット・アトウッドが1970年に出版した詩集 *The Journals of Susanna Moodie* を再読していたときです。「私は外国語の単語だ」という一文に衝撃を受けました。これがきっかけで、カナダの女流文学における翻訳上の比喩、実践、理論などをめぐる問題に関心を持ったのです。そしてこの関心はふくらみ続け、様々な方向へと伸びてゆきました。これまでにアトウッドの *Journals* (1992) やニコール・ブロッサールの *Journal intime* (2000) の翻訳に参加したり、カナダとオーストラリアの文化生産における翻訳家の表象を研究したり、また *Translation Theory and Performance in Contemporary Japan: Native Voices, Foreign Bodies* (St Jerome, 2008) では、演劇の翻訳と「翻訳劇場」について考察したりしました。2009年からは、環太平洋地域における出版物やパフォーマンスの翻訳について研究するプロジェクトに関わっています。このプロジェクトの一環として、ニューメディアのアーティストであるジャンヌ・ヒラリーと共に、翻訳というものが持つ流動性への関心を高めてもらうための短編映画も制作しました。ほとんどの場合、翻訳とは異言語間で行われるものと考えられがちですが、私が受け持つ授業や私自身の研究のなかでは、同一言語の内側、あるいは文化やメディアにおける翻訳についても考察しながら、それが変化という現象を理解する上でどのように有益か、という問題について取り上げたいと思っています。ICUでの新たな冒険がもたらす様々な変化、なかでも皆さんひとりひとりとの出会いという変化を楽しみにしています。(日本語訳：FD オフィス担当)



岩田 祐子

リベラルアーツ英語プログラム

今年の4月より、ELA Director に着任いたしました岩田祐子と申します。このFD Newsletter の場をお借りして皆様に自己紹介させていただくことができ大変うれしく存じます。また直接お会いしてお話しできますことを願っております。

私は英語教育と社会言語学を専門としております。私はICUを卒業した後、アメリカの大学院で英語教授法を専攻しました。修士課程終了後は、神奈川県東海大学で英語教育に従事しました。東海大学で外国語としての英語、社会言語学、異文化コミュニケーションを教えるかたわら、談話分析の手法を使って、二言語による社会化 (bilingual socialization) を分析し、ICUでの博士論文といたしました。現在は主に、初対面会話における英語会話と日本語会話の談話を会話ストラテジーに焦点を当てながら分析しています。

学部と大学院博士課程後期を過ごしたICUのキャンパスに教員として戻ってきた当初、4月のキャンパスの新緑の美しさに心が洗われる思いでした。先生方の教育や研究に対する真摯な思いや学生の真剣に学ぶ姿勢に触れ、感銘を受けました。ICUの教育や研究に精一杯献身してまいりたいと思います。ELA Director として、学生が英語力を伸ばすことを助けるとともに、批判的分析力や学習スキルを身につけることを手助けしたいと思っています。これらの力は、ICUのリベラルアーツ教育に必要なものだからです。



金子 拓也

経済・経営学 Departメント

本年4月に、経済・経営学 Departメントに着任し、ファイナンス関連の授業を担当しております。緑豊かで隔々まで管理の行き届いた美しいキャンパスに身を置き、教育や研究活動に従事できることを大変幸せに感じています。3月までは、銀行や格付け機関において、投資リスクの計量やポートフォリオ管理に関する研究を行ってまいりました。研究調査活動の一方で、取引金融機関の決算のため、数千件のデリバティブや証券化商品の時価を、短時間で評価して定期的に配信したりもしていました。これまで、さまざまな金融危機をほぼその中心部で実際に経験し、日付が変わってから帰宅することもたびたびありましたが、今となっては良い思い出です。

最近には特に、アベノミクスや日銀による異次元緩和の影響もあり、多くの人にとって投資を含む“ファイナンス”という言葉は、ぐっと身近なものとなりました。しかしながら、グローバル化やIT技術の進化の加速により、市場の風向きはとて変わりがやすく、先行きの見通しがとても立て辛くなっているというのも事実です。安易な投資は避け、リスク感覚を十分に養ってから行動することがとても重要なのですが、このことがどこまで浸透しているのか、心配に感じることがあります。ファイナンスは、要因ごとに分解すると、統計学、数学、経営学、経済学、計算機科学など複数の分野から構成されていますが、その最大の魅力は、これらの要因を個別独立に学べばよいのではなく、相互関係を意識しながら調査研究する点であると、私は考えています。学生には、視野を広く保ち、いろいろなことに興味を持ち続けてもらいたいと願っています。

研究や授業の後は、剣道部の練習にも参加しており、学生とともにさわやかな汗を流しています。キャンパスで見かけた際には、是非お声掛けください。どうぞよろしくお願いいたします。



河内 宏

生命科学 Departメント

2013年4月から Othmer 記念科学教授として生命科学 Departメントに所属しております。よろしくお願いたします。私の ICU との出会いは半世紀以上も前にさかのぼるのですが、中学生時代をお隣の小金井市で過ごした関係で、このキャンパスは自転車で走り回る恰好の遊び場でした。当時はもちろん野川公園も東八道路もなく、どこまでも雑木林と芝生が続く広大なキャンパスでした。長い年月を経て、私の子供時代の武蔵野の景観が今もそのまま残る美しい ICU で働く機会を与えていただいたことに感謝しております。

私は農学系大学院で学位を取得後、農林水産省傘下の研究所に職を得て、数年で茨城県つくばに移転、その後何度かの組織改編で研究所や研究室の名称は変わりましたが、60歳で定年を迎えるまで、同じ研究室で研究に従事してまいりました。専門は植物生理学・分子遺伝学・分子生物学です。具体的には、植物と微生物の相互作用、とくにマメ科植物と根粒菌の共生による窒素固定の分子機構の解明を目指して、もっぱら基礎的研究にたずさわってきました。ICUでの学部教育経験は非常勤講師、客員教授の期間も含めて足かけ6年になるのですが、ICU独特の1学部1学科制に基づく学際的な教育システムを生かしつつ、その中で、日進月歩の生物学の本格的な専門教育をどのように位置づけ実現していくか、ということに心をくわदैていきたいと望んでいます。どうぞよろしくお願いいたします。



新垣 修

政治学・国際関係学部門

はじめまして。これから皆さんと織りなす関係を、丁寧に紡ぎ上げたいと願っています。

私は、沖縄で生まれ育ちました。米国の施政権下から沖縄が本土復帰した1972年。国と国との関係の有様、そこで生活する人々に大きな影響を与える現象を自ら体験しました。大学生になってから持った国際法や国際関係論への関心は、そんな少年時代の記憶がたぐり寄せたものなのでしょう。

大学院修了後はすぐ、実践の世界に飛び込みました。国連機関で国際法務に従事し、国際開発援助に関わりを持つ機会にも恵まれました。このような時期を経て大学教員に身を転じたのは、10年以上も昔のことです。ただ、国家間の利害を調整して国際協力の可能性を探りつつ、暴力の犠牲となっている人々を救済するという困難な作業は、今でも私のバックボーンとなっています。

本学で担当する主な科目は国際法です。周辺に追いやられた人々の声を聞き漏らすことなく、民族紛争や領土問題、国際経済危機、気候変動といったグローバルな課題に向きあい、これを読み解く鍵を共に追い求めましょう。

学生がそれぞれの可能性を最大限開花させ、グローバルな舞台で創造的な仕事を開拓できるよう、また価値ある人生を全うするための選択肢を広げられるよう、彼らの支えとなる。そのために、学生の知の忠実な僕となる一私に自分の使命と感じてきたことです。本学でこれを果たせるよう、最善を尽くしたいと思います。



橋本 和典

心理学部門

2013年9月1日に、心理学部門准教授として着任いたしました橋本和典です。専門は、臨床心理学です。特に、精神的な症状をなくすという一から0を狙う「治療」のみならず、治療を越えて、逞しくしなやかな心を育て、鍛える「治癒」まで行う精神分析的心理療法・集団精神療法の専門家です。92年にICUの語学科に入学し、アメリカンスタディーズプログラムを96年に卒業しました。学部時代に出会い、今なお臨床の師である小谷英文先生（現ICU名誉教授）の元で、私の10年の臨床研究をまとめ、学位を得ました。まさに、ICUは、私を一人前の臨床家、研究者として育ててくれた一つの大事な「ホーム」であり、尊敬するICUファカルティの一員となれたことを大変光栄に思っております。

そして、今、私のもう一つの「ホーム」が深刻な危機にあります。福島です。私は、「ストレスに強い福島の再生を」と、震災PTSDの治療・治癒・予防のための誰でも通える無料相談クリニック、「福島復興心理・教育臨床センター」をこの9月1日に、地元の力強い協力者や臨床仲間と共に立ち上げました。奇しくもその直後、「東京オリンピック決定」「汚染水問題は、7年で完全決着」「仮設入居率なお9割」と大きなニュースが続きました。こうしたマクロな世界が大きく動きだすとき、決まって見て見ぬふり（否認）されるのが一人一人の心の世界です。広島、長崎、そして今なお続く沖縄、エジプト、シリア。危機を越えるタフな人材、リーダーシップ育成、心をど真ん中においた教育こそが、私の教育者としての重要な使命ではないか。そんな認識を新たにしています。今後ともどうぞ、よろしくお願いいたします。

❖ FD セミナー報告

「オープンコースウェアとオープンエデュケーション」

講師：宮川 繁（献学 60 周年記念教授・マサチューセッツ工科大学教授）

日時：6 月 12 日（水）12：50～13：40

会場：本館 170 教室

宮川先生は、2001 年にマサチューセッツ工科大学（MIT）でオープンコースウェア（OCW）を始められたメンバーの一人で、現在は MIT オープンコースウェア・ファカルティ アドバイザリー委員会の委員長を務めています。セミナーでは OCW の黎明期から今の動きまでを紹介していただきました。

オープンコースウェアとは、大学の講義をインターネットを通じて公開するもので、講義のビデオをネット配信し、ときにはテキストや配布物などを同時にダウンロードすることによって、インターネットに接続できれば、世界中どこでもいつでも大学で行われている講義を誰もが無料で聴講できるというものです。すぐにアメリカの有力大学でも開始され、いまでは数十の大学が「本物」の教材を無料で公開しています。講義に登録して宿題を採点してもらうなど双方向的なコミュニケーションを行うこともできるようになり、登録が十万人をこえる講義も出てくるなど、大きな潮流を作りつつあります。

MIT でこの試みが始まったのは、インターネットの特性を活かして、知の普及に貢献するとともに、大学の講義を公開する事によって国内外の高校生の大学選択を助けたり、FD としては、同僚の講義を見る事によって講義改善の一助とす

ることなどが、当初の目的として掲げられていたようです。今では実際に単位を認定することによって学習意欲を高め、教育環境が必ずしも整っていない国や地域にいる隠れた優秀な人材を発掘することにも役立っているとのこと。

同様のインターネットを利用した取組みの Coursera、edX、Udacity など MOOCs（Massive Open Online Courses）が澎湃として立ち上げられ普及しつつあり、大学発だけではなく Kahn Academy という個人が自分の知人のために Youtube にアップロードした講義が評判を呼んで学校の授業に取り入れられるようになり教育 NPO として発展しつつあるなど、わずか 10 年ほどでこの流れは大きな可能性をもって世界中の教育に変革を齎そうとしています。

日本でも慶応義塾大学から JOCW の活動が始まり、ICU も 2013 年 4 月から ICU OCW の公開を始めました。ICU ではコース全部を公開しているものはありませんが、ICU の教育の特色とそれを支える教員の活動を広く世界に知ってもらうとともに、知恵を集めてすでに社会インフラとなっているインターネットをより効果的に使っていく可能性とその重要性をあらためて認識させていただきました。

久保 謙哉

「より効果的な授業を目指した ティーチング・アシスタントの活用について」

プレゼンテーション：池田 理知子（社会・文化・メディア部門）

オルバーグ・ジェレマイア（宗教・哲学部門）

埴 幸枝（TA）、小平 友美（TA）

日時：9月11日（水）12：50～13：40

会場：本館316教室

このセミナーは、TAの効果的な活用の実践例を学ぶために開催されたもので、2013年度春学期の授業効果調査において、TAによって授業が効果的になったと思うと回答した学生が比較的多かったコースの中から、2組の教員とTAに登壇していただいた。

1組目は池田理知子教授とTAの埴幸枝さん。埴さんは将来、教育者・研究者になりたいという希望をもっていることもあり、池田教授は埴さんに実質的な業務に携わらせ、様々なことを学んでもらおうと試みたようだ。たとえばクラス全体で湯浅八郎記念館に見学に行くという実践を行った際、下見から計画の立案、当日の学生の誘導までを埴さんは池田教授と共に行った。また、池田教授の指導のもと、授業計画を作成し、模擬授業も行った。

埴さんは、教員と学生の間立つTAである自分にはどのような役割が期待されているのか、常に考えさせられたという。教員ではないTAには知識的には限りがあるため、たとえば学生の意見に対しては、回答を示すのではなく、想定される異論・反論にはどのようなものがあるのかを示すようにしたという。また数ある業務のなかでも、特に、模擬授業は有意義な経験だったようだ。学生からコメントシートをもらうことで、自分の研究がどのような意味をもつのかを考える良い機会にもなったという。

2組目は、オルバーグ・ジェレマイア教授とTAの小平友美さん。短いレポートや課題の提出が頻繁に課されるコースを例に報告してもらった。小平さんは、Moodleに提出されたレポート等が、課題に応じた長さや内容であるかどうかを

チェックし、練習問題については採点も行った。オンラインでの課題提出に伴う技術的な問題への対応も小平さんが担った。そして、学生から質問があった場合は、オルバーグ教授にそのことを伝えた。オンラインでの業務には慣れるまで時間を要したそうだが、困難なことや不慣れなことがあればその都度オルバーグ教授に相談したという。

オルバーグ教授からは、TAの経験をより意義深いものにするには、TAに責任ある仕事を任せなければならないというコメントがあった。一方、小平さんからは、責任が重い仕事であるほど、教員とのコミュニケーションが重要だというコメントがあった。

今回報告してもらった2組は、TAが授業に参加して業務を行う機会が多かった前者に対し、後者はオンラインでの課題確認を中心とした業務であり、改めてTA業務の幅広さや働き方の多様さを知る機会ともなった。業務形態は対照的な2組だが、他方でいくつかの共通点も見受けられた。まず、TAにある程度責任ある仕事が任されていること。そしてTA自身がそのような仕事に責任感をもって積極的に取り組んでいること。さらに教員とTAとのコミュニケーションが密であることだ。各々のTAには、責任の重い業務や慣れない業務が任されていたが、教員と密にコミュニケーションをとることで、任務を果たすことができおり、またその過程で教員とTAの間に深い信頼関係が築かれているようにも感じられた。教員・TA・学生の三者に裨益するTA制度の理想型を掴むことのできた有意義なセミナーだった。

西納 由紀

編集後記

2013年4月に学事部に異動し、初めてFD Newsletterの編集に携わりました。現在のような発行頻度・形態でFD Newsletterが作成されるようになったのは1996年度からです。学事部内にあるアーカイブを紐解くと、その時々テーマを追うだけでもICUのFD活動の歴史が直に感じられます。今号は、これまでの仕様を見直し、FD Newsletter発行初期の仕様に近い、より簡素な形態で発行することになりました。FD Newsletterは大学のウェブサイトでも公開しますので、併せてご参照いただければと思います。

学事部 教養学部事務グループ 西納 由紀

Published by the Office of Faculty Development
CLA Group, Academic Affairs Division, International Christian University
Administration Building Room 103, 10-2, Osawa 3-chome, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan
Phone: (0422) 33-3639 Fax: (0422) 33-3788 Email: fd-support@icu.ac.jp
